



マル生運動へ再びカマ首もたげる「能力開発課」

国鉄本社・能力開発課は、東京三局内の「人材活用センター」へ強制配転させた国労組合員に対して「企業人教育の一環」など称し、断じて許すことのできない「指示」を強制してきた。

それによると、八月三〇日に、災天下の箱根・旧東海道の三二キロを十一時間かけて歩けというものである。能力開発課は、「この教育は利用者へのサービスマンなど企業人にふさわしい教育をして働く意欲の向上をはかるため」に行うなどと言っている。

「これじゃ軍隊とかわらない」「奴隷と同じじゃないか」「こんなことまで許していいのか」
国鉄当局の、こんな暴挙を許しているのは国労中央の無方針だ。敵の凶暴な攻撃の前に組合員をさらしてきた国労中央の敗北主義・屈服にある。国鉄労働者の怒りを一点に結束して闘う方針をうちたてよう。

「能力開発課」こそ、マル生運動時、生産性運動を国鉄にもち込み、労働者を労働生産性向上の担い手にするため、国労・動労の組織破壊・組織分裂に暗躍し、悪名をはせた部署である。再びカマ首をもたげ国労・動労千葉破壊のためにマル生運動をはじめている。

たたかいこそが組織・雇用を守る

動労革マル・鉄労のマル生四組合は、「国鉄改革労使協議会」をデッチ上げ、当局と一体となって国労分裂・解体を唯

一目的にして大攻撃にできている。

にもかかわらず、国労中央は、相も変わらず「大胆な妥協」で「組織と雇用を守る」などと後退を重ね、組合員を敵のなすままにさらしているのだ。

国鉄分割・民営化は、十万人首切りであり、国労解体・国鉄労働運動の壊滅・一掃であり、中曽根が政治生命をかけている「戦後政治の総決算」の基軸をなす大攻撃である以上、何んらかの妥協（共同宣言締結）などでのりきれるわけがない。

たたかいこそが国労の組織と組合員の雇用を守ることなのだ。

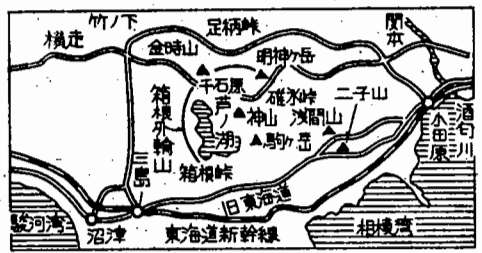
もはやこれ以上がマンにはいられない

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉碎！

国鉄人活センター特訓

箱根八里を歩きなさい

耐久訓練で、「天下の険」とうたわれた箱根八里を歩け——国鉄は「余剰人員」を集めた全国各地の人材活用センターで、さまざまな人材の活用実践に取り組みているが、東京では三十一日、小田原—三島間の旧東海道三十二キロを、三十一日午後三時から三十二日午前十一時にかけて歩かせることにした。国鉄当局は「企業人教育の一環」と説明しているものの、国労（山崎俊一委員長）の東京地方本部は「暑いなか、こんな長距離を歩かせるのは軍隊の行軍訓練に近い。人権を無視している」と反発、中止を求めた。



三十二キロを歩くよう指示されたのは、東京南、北、西鉄道管理局管内の人活センターに配属された千四百人。いずれも国労

の組合員だ。「利用者へのサービス態度など、企業人にふさわしい教育をして、働く意欲の向上をはかるため」（国鉄本社能力開発課）と、二十六日から十日間の日程で静岡県三島市にある中央鉄道学園付属三島技術学園に、これらの人を集めて、教育・訓練をしている。いずれも二十代から四十五歳前後の人たちで、隊列を組んでクラウドを進行する団体行動訓練、地図で指定された地点を歩くラリー、学者や経営者の講演ビデオを見ての討論、などがカリキュラムだ。まじ、二十四人全員が国労の組合員という点について、当局は「人活センターには国労組合員が多く、偶然の結果だ」と説明している。

32キロをどう歩めるか

新入社員を対象の歩行ラリーなら10—15キロ程度

三十二キロという距離、どう歩めるか。就職情報会社「ダイヤモンド・ピット」によると、多くの耐久訓練は新入社員を対象に行われる。それも登山や歩行ラリーなどが主体で、歩行ラリーの距離は十—十五キロ程度。陸上自衛隊の体験入隊では、サーキット訓練やソフトボールなどの球技は行われないが、長距離の行軍訓練は「体力的に無理なのでやらせない」（陸軍広報課）。民間の研修機関の中には、長距離の歩行訓練もある。「管理職養成学校」（静岡県豊川町）が一人の参加費二十七万八千円で開いている「地獄の特訓三日間」では三十二、三十三、三十四日の夜間行進訓練がある。

「企業人教育の一環」——あす11時間がかりで国労「行軍」と反発

これに対し、国労は「炎天下に歩かされたら、すさまじい疲労となる。参加者には四十歳を過ぎた人もおり、事故がかわらない」と懸念し、さらに「肉体を酷使、疲労させる」と反発、民営化への抵抗意欲を失わせようとしているのではないかと反発している。このため、二十九日は三島駅前反対のデモを、三十日は小田原駅前抗議集会を開く。

8月29日

新報 八月

組織破壊攻撃を粉碎せよ